

私の工夫

OPPAと「問い」の工夫

県立林野高等学校
指導教諭 瀬島 美穂



1 おひらめ

平成28年度から30年度までの3年間、林野高校は文部科学省から「高校生の基礎学力の定着に向けた学習改善のための調査研究事業」の研究実践校に指定された。この事業は、それまで教員一人一人が行ってきた取組を学校全体で共有し、「チーム林野」として学習改善に臨む体制作りにより大きな成果をもたらした。私は事業の主担当者として旗振り役を務めたが、本稿では、自分自身が周囲と協力しながら取り組んできた学習改善の工夫の一部を紹介する。

2 現状分析

研究の最初に取り組んだのは、「授業の課題を発見する」ことであつた。林野高校では、生徒によ

る授業評価アンケートがしばらく実施されていなかったが、すべての授業についてアンケート（図1）を実施した。

集計の結果、8項目のうち生徒の肯定的な評価が低かつたのは質問2・4・5・7であつた（図2点線）。そこで、その他のアセスメント結果も踏まえたうえで、課題として次の点を挙げて研究に取り組んだ。

- ① 学習状況を生徒自身が振り返り、成長のメタ認知が可能になる仕組みを工夫する。
- ② 教科・科目や単元、また授業単位でどのような力を付けたいかを検討し、生徒に授業の目標として示す。
- ③ 生徒が主体的に学ぼうとする意欲を高めるために、教師が生徒に発する「問い」を研究する。

- 質問1 この授業では、「学習のめあて」がわかりやすく示されていますか。
- 質問2 あなたは、この授業を通して身につけたい力を意識できていますか。
- 質問3 担当者は、授業に意欲的にとり組めるような工夫をおこなっていますか。
- 質問4 この授業では、知識・技能を確実に習得できていますか。
- 質問5 この授業では、学んだ知識・技能を活用して自分で考え、その考えを表現する機会がありますか。
- 質問6 この授業では、生徒どうしが教え合い、考えを深め合う機会がありますか。
- 質問7 この授業では、あなたが、授業（あるいは単元全体）を振り返る時間や手段がありますか。
- 質問8 この科目で、あなたの力は正當に評価されていると感じますか。

図1 授業評価アンケート質問項目

3 授業での取組 OPPA

平成24年度末、ある校長先生よりOPPA（一枚ポートフォリオ評価法）について教えていただいた。OPPAは、山梨大学副学長の堀哲夫先生の提案によるものである。私は平成25年度から、このOPPAを始めた。同僚にも紹介するなどして、現在は理科・数学科等で取り組んでいる。授業評価アンケートから浮かんだ前述の課題③について校内で検討した際にも、方法の一つとして提案した。

一枚の用紙に、単元の導入時に「単元を貫く問い」を生徒に示し、生徒はその問いに対する回答を記入する↓授業ごとに、その日の学

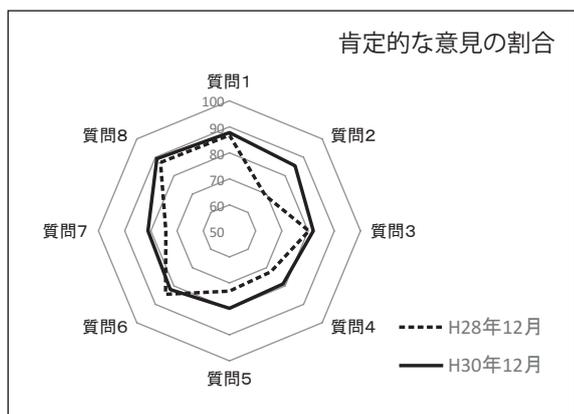


図2 授業評価アンケート結果

習内容で最も大切なことを、コンパクトな自分の言葉で記述する↓単元のまとめとして、導入時と同じ問いに回答する。以上がOPP

ICE	問いのレベル	問いの例
I (Ideas)	理解、習得を促す問い	「～は、何か?」「～は、どれか?」 What
C (Connections)	つながりを作る問い	「判断の根拠は?」「もし、そうだったら?」「どんな仮説を立てられる?」 Why/If
E (Extensions)	応用する問い	「何が足りなかった?」「どうすれば解決できる?」「どうやったら、効果的か?」「新たな解釈は?」「どうすれば、仮説を検証できる?」 How
	意味、意義を問う本質的な問い	「結局、(あなたにとって)何なのか?」「あなたは～に対してどう(行動)するか?」「(学びを生かして)どんな提案をするか?」 So what/So how

図4 ICEモデルによる問いのフェーズ

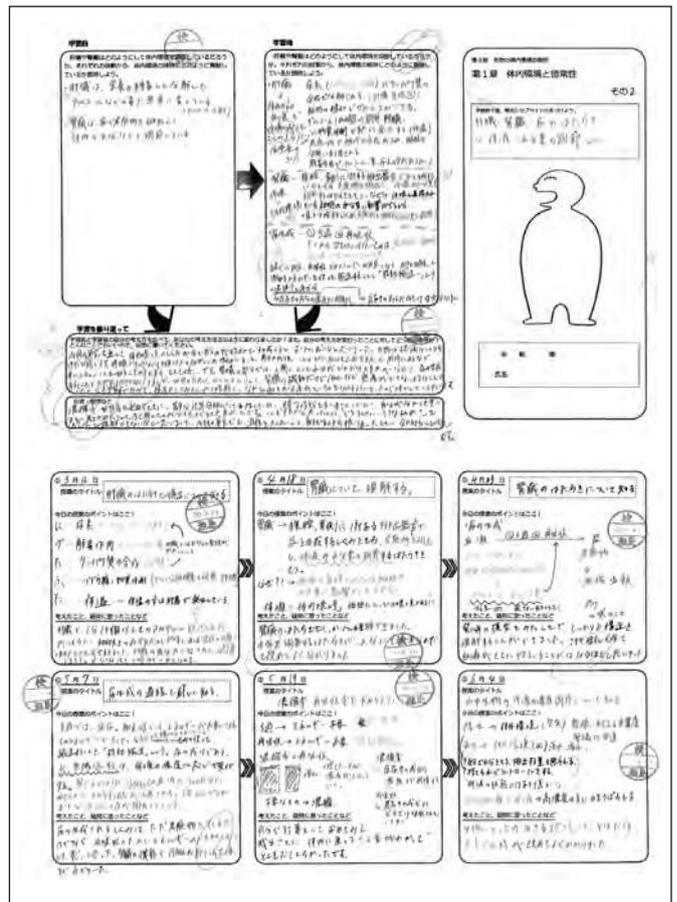


図3 OPPシート

シート(図3)作成の手順である。生徒は授業記録としてノートも作成するが、OPPシートにはノートとは異なる利点がある。その日の授業内容の振り返りで学習内容への理解が深まる。一枚の紙面で授業と授業のつながりをひと目で見通せる。学習後のまとめでは単元全体を踏まえた表現ができるようになる。提出することで、授業者もその日の振り返りができ、指導計画の改善ができる、などである。

本校の授業は一校時四十五分で、

毎時間の振り返り時間の確保が難しいことはあるが、他教科でも、OPPシートの作成や学習前後の問いの設定、単元全体を見通した振り返りに取り組むようになった。

4 授業での取組

ICEモデルを参考にした問いの研究

OPPAを行うとき、難しいのは「単元を貫く問い」の設定である。学びの動機付けとなり、日常生活や身近な事象と教科の学習を結びつけ、同時に単元の終了時に、生徒自身が身についた力を自覚できる。そんな問いを生徒に提示することができれば、それに答えることで単元の目標が達成できる。

欲張りな条件だが、この条件に近づく問いのヒントになるのが、ICEモデル(図4)である。

指定事業を機会に、他校の教育実践を視察させていただいた。その中の最も大きな学びは、広島県立祇園北高等学校の柞磨昭孝(あさき しょうこう)校長先生に御教授いただいたICEモデルだった。ICEは、学習成立過程の評価モデルである。林野高校でも、前述の研究課題②③の取組にICEモデルを活用している。

私達はICEの「E」を想定して問いを考えるようになった。私が担当している生物であれば、「酵素の性質を踏まえて、パイナップルを使ったゼリーのレシピを提案せよ(代謝)」「ジュラシックパークは実現可能か(遺伝情報の発現)」「ブタは腐らないのに、豚肉が腐るのはなぜか(免疫)」「あなたが知っているものは現実か(刺激の受容)」といった具合である。生徒は学習内容を活用し、工夫して回答してくれている。

5 おわりに

本校では、他にもICTの新しい活用、協同学習など、教員が相互に情報交換をしながら工夫を共有して教育実践を行っている。ここで紹介したOPPAやICEモデルを活用した授業も、その一例である。平成30年度の授業評価アンケート結果(図2実線)を見ると、平成28年度に見られた課題が改善されていることがわかるが、これは「チーム林野」の成果である。育てたい生徒像を共有し、これからも全教員で生徒を伸ばす教育を実践していきたい。